

現代中国語における能動文と受動文の非対立 —否定形式を中心に—

顧 彬楠

DOI: 10.18999/stul.35.39

1. はじめに

文の意味という方面からヴォイスを捉える場合、一つの出来事をどの参与者から捉えているのかを表現する概念であると規定することができる(早津 2005、中島 2007、木村・鷺尾 2008、木村・高見 2011 など)。村木(1991:18)では、ヴォイスの観点から、能動文と直接受動文は同一事象のどの関与者を中心に述べるかという立場の違いにより対立するものの、事象は一つであると指摘されている。次の例(1)は受動文であり、例(2)は例(1)と対応する能動文である。

(1)她哭着说, 姑姑啊, 姑姑, 我上了他的当, 我被他骗了, 即便他用八人大轿来娶我, 我也不会嫁给这样的畜生。 (莫言《蛙》/BCC)

(彼女は「おばさん、おばさん、彼のわなにはまった。私は彼に騙されたの。彼がたとえ 8 人担ぎの籠を用意して私を娶ろうとしても、こんな畜生と結婚しない！」と泣きながら言った。)

(2)她哭着说, 姑姑啊, 姑姑, 我上了他的当, 他骗了我, 即便他用八人大轿来娶我, 我也不会嫁给这样的畜生。¹

(彼女は「おばさん、おばさん、彼のわなにはまった。彼は私を騙したの。彼がたとえ 8 人担ぎの籠を用意して私を娶ろうとしても、こんな畜生と結婚しない！」と泣きながら言った。)

例(1)の下線部の受動文は、被動作主「私」に焦点を当て、「私」がどうなったのかについて

¹ 本稿において出典を記していない用例はすべて作例である。また、用例の日本語訳は、全て引用者によるものである。

で述べる文である。それに対して、例(2)の下線部の能動文は、動作主「彼」に焦点を当て、「彼」が何をしたのかについて述べる文である。このように、両文は同じく「彼が私を騙した」という事象を表すものの、事象に参加する「彼」と「私」のどちらを中心に捉えるかという点において対立している。

しかし、以下の例(3)と(4)が示すように、受動文が否定の形をとる場合、以上のような受動文と能動文の対立現象が必ずしも成立するとは限らない。

(3) 凡与钱有关的事, 我从来没被人骗过。 (卡尔·麦《藏金潭夺宝》/ BCC)

(およそお金のことに関しては、私はこれまで人に騙されたことがない。)

(4) 凡与钱有关的事, 谁也从来没骗过我。

(およそお金のことに関しては、これまで誰も私を騙したことがない。)

例(4)の下線部の能動文は「動作主“某人”が被動作主“我”に対し“騙”という行為を行わなかった」ことを表しているのに対し、例(3)の下線部の受動文は例(4)の能動文が表す意味以外に、「動作主“某人”は被動作主“我”に対し“騙”という行為を行なったが、“我”は騙されなかった」という意味にも解釈できる。

以上から見ると、事象の成立を表す肯定形式の受動文は「動作主が被動作主に対し、ある動作行為を行ない、被動作主には何らかの変化や結果が生じた」という動作の結果まで含意する事象を表す。一方、事象の不成立を表す否定形式の受動文には二つの場面が想定できると考える。一つは「動作主が被動作主に対し、動作行為そのものを行わなかった」という意味を表す場合である。この場合、受動文は対応する能動文と同一事象を異なる参加者を中心に捉える点で対立しており、動作そのもの(ここでは“騙”)が起こっていないため、当然動作の結果は生じない。もう一つは「動作主が被動作主に対し、ある動作行為を行ったが、その動作の結果が生じなかった」という意味を表す場合である。この場合、受動文は対応する能動文とは異なる事象を表すことにより対立せず、動作は行われたものの、その結果は含意されていないことになる。

本稿では、受動文の否定形式が二つの事象を表し得る原因を究明し、併せて否定形式においてのみ、このような能動文と受動文の非対立が生じる理由について考察する。

2. 事象成立のあり方

朱德熙(1982:70)では、副詞“没(有)”は述詞性成分の前に加え、「動作が完成してい

ない」或いは「事象が生起していない」を表す(“没”和“没有”加在谓词性成分前边表示动作没有完成或是事情没有发生)と述べられている。つまり、事象の不成立には「完成していない」と「最初から発生していない」という二つの状況が含まれている。これまでの研究は肯定形式の受動文に集中してきたが、事象の不成立を表す否定形式の受動文に関する研究はまだ少ないようである。林青樺(2009)は事象のあり方との関わりから現代日本語におけるヴォイス表現について考察を行っており、事象成立のあり方について、以下のように分類し規定している。

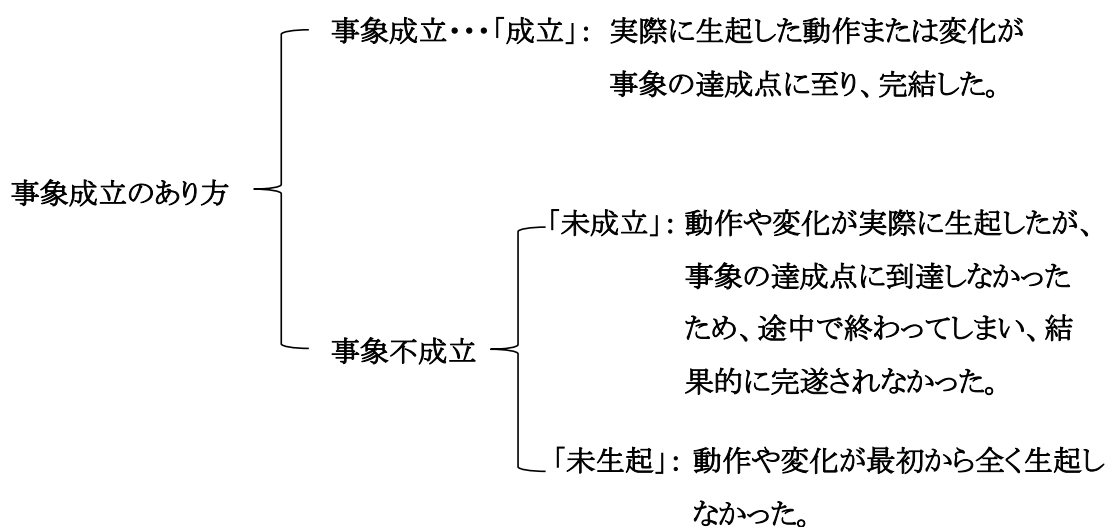


図1 事象成立のあり方 林青樺(2009:101)

前節で述べたように、中国語では、事象の不成立を表す否定形式の受動文には「動作主が被動作主に対し動作を行わなかった」と「動作主が被動作主に対し動作を行ったが、その動作の結果が生じなかった」という二つの意味解釈が可能であり、それぞれ林青樺(2009)の「未生起」と「未成立」に対応している。

林青樺(2009:97-113)はこの事象成立のあり方の観点から、日本語では事象の不成立を表す受動文に見られる「未生起」と「未成立」の意味が、それぞれもとの動詞の語彙的意味に内在する<開始限界>と<終了限界>のあり方によって決まると指摘している。林青樺(2009:103)の説明によれば、「未生起」は動作が<開始限界>に至らなかったことを意味するのに対し、「未成立」は<開始限界>を越えた動作が<終了限界>に至らなかったことを意味する。そのため、<開始限界>だけ有する非限界動詞の場合、「未生起」の意味

しか含まれない。<開始限界>と<終了限界>の両方有する限界動詞の場合、「未生起」だけではなく、動作の<終了限界>に至らなかったことを示す「未成立」も表すことが可

能である。例えば、「殴る」は非限界動詞のため、例(5)は「未生起」しか表さないのに対し、一方、「騙す」は限界動詞²であり、例(6)は「未生起」と「未成立」の両方を表すことができる。

(5) 僕は山田くんに殴られなかった。(林青樺 2009:102)

(6) 花子は太郎に騙されなかった。(林青樺 2009:102)

林青樺(2009)の指摘によると、「未成立」は動作が<終了限界>に至らなかったことを示している。つまり、<終了限界>を有する限界動詞は当然「未成立」を表すことが可能である。しかし、<終了限界>が元々存在しない非限界動詞の場合、動作が一旦<開始限界>を越えると、<終了限界>に至ることができず、「未成立」を表せるはずである。故に、否定形式の受動文に見られる「未生起」と「未成立」の意味について、動詞の<開始限界>と<終了限界>のあり方によって説明するだけでは不十分であると考えられるため、より有力的な解釈が求められる。本稿は林青樺(2009)の「未生起」と「未成立」の概念を援用し、中国語の否定形式の受動文が二つの事象を表せる原因を究明する。

3. 受動文の否定形式の意味解釈

3.1 「未成立」の意味を表す受動文

中国語では事象の不成立を表す否定形式の受動文には「未生起」と「未成立」という二つの意味解釈が可能である。しかし、否定形式の受動文は必ずこの二つの意味両方を持つとは限らない。例えば、以下の例(7)(8)(9)のように述語部分が動補構造の場合、受動文は「未成立」の意味しか読み取れない。

(7) “你!” 铁岳凯上前一步, 颇有想找他一决胜负的气势, 严龙昕没被他吓住。

(梦萝《巫女的屠魔英雄》/ BCC)

(「お前!」铁岳凯は前に一步進み出し、严龙昕に勝負を挑む勢いでいたが、严龙昕は彼に驚かなかった。)

² 本論文で使われる「限界動詞」と「非限界動詞」という概念は、工藤 1995、金水 2000 などが取る定義を参照する。すなわち、該当動詞が指示する出来事が、ある終了限界を越えなければ、達成されたと見なされない動詞を「限界動詞」と呼ぶ。例えば、「騙す」という動詞が表す出来事は、「誰かが騙された」という終結局面(これが終了限界である)が達成されなければ、その出来事が達成されたとはいえない。一方、「殴る」という動詞が表す出来事は、「殴り始める」という開始限界が達成されれば、その出来事が達成されたとはいえる。このような動詞は「非限界動詞」と呼ばれる。

(8) 百灵鸟虽然还没被农民的险恶机关捉住，却随时有落入鹰爪之中的危险。

(拉・封丹《拉封丹寓言》/ BCC)

(ヒバリはまだ農民の罠には捕まらなかったが、いつでも鷹に捕まる危険がある。)

(9) 如果你想知道的话，我可以告诉你，我也没被你骗过去。 (微博 / BCC)

(もし知りたいのならば、教えます。私もあなたに騙されてはいない。)

例(7)では、動作主の“他(铁岳凯)”が被動作主の“严龙昕”に対し「驚かす」行為を加えたが、“严龙昕”は結局驚いたという結果にならなかったことを表している。同様に、例(8)では、動作主の“农民”が被動作主の“百灵鸟”に対し「捕まえる」行為を行なったが、“百灵鸟”は結局捕まらなかったことを示している。また、例(9)では、動作主の“你”が被動作主の“我”に「騙す」行為をしたが、“我”は結局騙された結果にならなかったことを表している。この三つの例文はいずれも「未成立」という動作の結果が含意されていない場合を表している。石毓智(2001:27)では、“没”で動補構造を否定する場合、補語が表す結果のみを否定し、述語が表す動作行為は否定できないと指摘されている。この指摘によると、否定形式の受動文の述語部分が動補構造の場合、受動文は「動作主は被動作主に対し動作を行ったが、その動作の結果が生じなかった」という「未成立」の意味しか表せない。

なお、以上の例(7)(8)(9)に対応する能動文が表す事象も「未成立」の意味しか含まない。例えば、例(7)に対応する能動文“他没吓住严龙昕”は受動文と同じく「“他”が“严龙昕”を驚かせたが、“严龙昕”は結局驚かなかった。」という「未成立」の意味を表す。

以上の例文から見ると、事象の不成立を表す否定形式の受動文は、述語部分が動補構造の場合、対応する能動文と同じく「未成立」の事象を表し、両構文は事象の参加者のどちらを中心に捉えるかという点においてヴォイスの対立関係が成立している。

3.2 「未生起」の意味を表す受動文

述語部分が動補構造ではない際、否定形式の受動文は「未生起」の意味しか表せないケースと「未生起」「未成立」両方の意味を持つケースが見られる。まずは例(10)～(14)のように「未生起」の意味しか表せない否定形式の受動文を考察する。

(10) WANLYA 的恶作剧被他一眼识破了，潘氏的负责人立即进行了安全检查。谢天谢地，莎维尔没被怀疑。 (芳想《基因导弹》/ BCC)

(WANLYA のいたずらは彼に見破られた。潘氏の担当者はすぐにセキュリティチェッ

クを行った。幸いなことに、莎维尔は疑われなかった。)

(11) 结算时才被告之, 中国没被包括在旧书邮购范围之内。(《海外书香》文汇报 / BCC)
(会計する時になって初めて「中国は古本通販の郵送(可能)区域に含まれていない」と教えられた。)

(12) 真的越来越讽刺了, 原来从来没被信任, 不再触碰过去。 (微博 / BCC)
(本当にますます皮肉なことになった。私はもともと信用されていなかったんだ! 過去のことにはもう触れたくない。)

(13) 也许因为她们知道这个不吸引人的、受尽折磨的人一生没被任何一个女人爱过。
(契诃夫《文学教师》 / BCC)
(彼女たちはこの魅力のない、苦渋をなめ尽くした人が一生のうちで一人の女性に愛もされたことがないことを知っているかもしれない。)

(14) 打小就没人宠过, 你冷不丁这么热情我容易当成你要害我。
(王朔《玩的就是心跳》 / BCC)
(私は小さい頃から人に愛されたことがないから、あなたに急にこんなに熱心にされて、私を傷つけるつもりなのかと勘繰ってしまう。)

例(10)～(14)では、“没”で否定するのは“怀疑”、“包括”、“信任”“爱”、“宠”のような補語が付いていない裸の動詞であるため、直接にその動詞が表す行為を否定する。つまり、例(10)～(14)の受動文は、動作主が最初から対象に動作行為を行わなかったという「未生起」の意味しか表し得ない。

なお、以上の例(10)～(14)にそれぞれ対応する能動文が表す事象も「未生起」の意味しか表さない。例えば、例(13)に対応する能動文“也许因为她们知道没有任何一个女人爱过这个不吸引人的、受尽折磨的人”は受動文と同じく「動作主が最初から対象に対し「愛する」行為を行わなかったという「未生起」の意味を表し、両構文は同一事象の参与者のどちらを中心に捉えるかでヴォイスの対立関係が成立している。

3.3 「未成立」と「未生起」の意味を表す受動文

次に、以下の例(15)～(18)に挙げるように、中国語では、「未生起」と「未成立」の意味を持つ否定形式の受動文について考察する。

(15) 凡与钱有关的事我从来没人骗过。 (例(3)再掲)
(おおよそ金のことに関しては、私はこれまで人に騙されたことがない。)

(16) 家里遭贼了, 电脑没被偷, 还看到一帅警察, 你说我能不激动吗? (微博 / BCC)

(空巢にあってしまった。パソコンが盗まれなかった上、かっこいい警察にも会った、興奮しないわけがないでしょう。)

(17) 那校领导也太变态了吧, 不就是晚点回嘛, 再说了, 你又不知道我爬墙, 我又没被抓, 都那么久了还不舍得放过我。 (微博 / BCC)

(あの学校の校長は変態でしょ。帰るのがちょっと遅かっただけじゃないの、それに私が壁を乗り越えたのも知られなかったし、捕まりもしなかったわ。結構前のことなのに、まだ私を許さないなんて。)

(18) 武胜东究竟在什么地方? 他可以肯定武胜东就在他左近。 他没被杀, 武胜东一定不会就此罢休的。 (温瑞安《四大名捕会京师》 / BCC)

(武胜东は一体どこにいるのか。彼は武胜东が近くにいると確信している。彼が殺されていないなら、武胜东は決して諦めないはずだ。)

例(15)では、動作主が対象である「私」に対し「騙す」という行為自体を行わなかったという解釈(「未生起」)以外に、「騙す」行為を行なったものの、「私」が騙されるという結果には至らなかったという解釈(「未成立」)も可能である。同様に、例(16)については、動作主が最初から「盗む」行為をしなかった場合(「未生起」)と、動作主がパソコンを盗もうと試みたものの、結局実現しなかった場合(「未成立」)が考えられる。また、例(17)では、動作主が対象である「私」に対し「捕まえる」行為を加えなかったという意味(「未生起」)以外にも、「捕まえる」行為を行なったが、「私」が逃げて捕まるという結果に至らなかったという意味(「未成立」)にも読み取られる。例(18)については、最初から殺す意図がない未生起のケースと、殺そうと試みたものの、実現しなかった未成立のケースが考えられる。

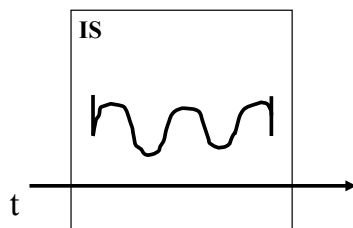
ただし、「未生起」と「未成立」の意味を持つ例(15)～(18)の対応する能動文が表す事象には「未生起」の意味しか含まれない。例えば、例(16)に対応する能動文“家里遭贼了, 没有偷电脑”は「動作主が最初から対象に対し「盗む」という行為を行わなかったという「未生起」の事態としか解釈できない。そのため、受動文は「未成立」の意味を表す場合、対応する能動文と異なる事象を表す点でヴォイスの対立関係が成立しない。

4. 能動文と受動文の非対立

第3節で述べたように、否定形式の受動文は述語部分が動補構造ではない場合、「未生

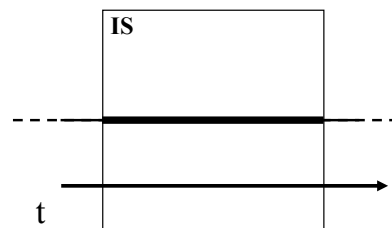
起」と「未成立」という二つの意味解釈が可能である。「未生起」の意味を表す場合、対応する能動文と同一事象の異なる参加者を中心に捉える点でヴォイスの対立関係が成立している。一方、「未成立」の意味を表す場合、対応する能動文と異なる事象を表す点でヴォイスの対立関係が成立しない。このように、受動文の否定形式が二つの事象を表せることにより、能動文と受動文の非対立が生じる。では、なぜ受動文の否定形式はこのような異なる二つの事象を表せるのであろうか。それは述語部分の動詞句に内在するアスペクト的意味に深く関わっていると考えられる。

認知言語学によるアスペクトの扱いは、基本的にプロセス(過程)における変化の有無に従って展開される。Langacker(2008)によれば、一般にアスペクトは完了プロセス(perfective process)と未完了プロセス(imperfective process)に大別される。これに基づくと、完了プロセス・未完了プロセスの区別により、動詞全体を二分することができる。完了プロセスは、時間上の変化をプロファイルし、典型的にはエネルギー伝達に関与し、繰り返しが可能な物理的行為を描くのに対し、未完了プロセスは、変化のない安定した状況の時間的広がりプロファイルし、繰り返しが不可能で時間的範囲の指定は存在しない。以下の図2と図3はそれぞれ完了プロセスと未完了プロセスの概念構造を表している。



~~~~~ =heterogeneity  
(状態変化)

図2 完了プロセス



———— =homogeneity  
(安定した状態)

図3 未完了プロセス

(Langacker2008:153)

“騙” “偷” “抓” “杀” は完了プロセスを持つ動詞である。このような動詞の表す行為の終点が明示されるという点で叙述の範囲が限定され、かつ繰り返しが許され、区切りのある完結した行為であるため、進行形も可能である(“正在骗” “正在偷” “正在抓”などは成立する)。以下の図4-1は完了アスペクト動詞の表す動作行為が表し得る局面を表している。



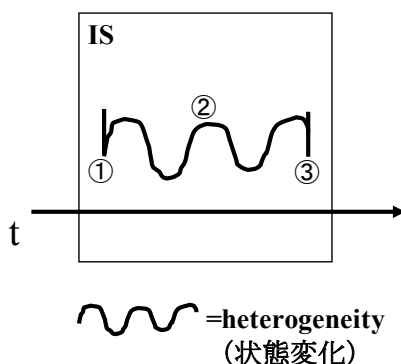


図 4-1 動詞の表す動作行為が持つ可能な局面

動詞の表す動作行為が①「起点に到達した」、②「起点を超えたが、始点と終点の間どこかに至った」、③「終点に至り、完結した」という三つの場合が考えられる。①を否定する場合、動作行為が起点に到達することを否定するため、「未生起」の意味が表されている。同様に、③を否定する場合、動作行為が終点に至ることを否定するため、「未成立」の意味が表されている。②を否定する場合は少々複雑である。例えば、動詞“偷”を例として、②は“正在被偷”であれば、②を否定する場合、“没在被偷”になる。“没在被偷”（「盗まれていない」）の意味を細かく分析すると、三つの解釈ができる。

一つの解釈は、A「最初から盗まれなかった。そして現在は盗まれていない」である。そのほか、B「以前盗まれそうになったが、盗む行為が失敗した。そして現在は盗まれていない」と C「以前盗む行為が成功して、盗まれたという結果が生じたが、現在は盗まれていない」のような場合も考えられる。A の場合は「未生起」の意味を表す。B の場合は「未成立」の意味を表す。C の場合は「成立」の意味を表すが、本研究は主に事象の不成立を考察するため、C の場合は考察の対象から外す。以上の考察をまとめると、完了プロセスを表す否定の意味の受動文は、「未生起」と「未成立」という二つの意味解釈が可能である。

一方、“怀疑”、“包括”、“信任”、“爱”、“宠”は未完了プロセスを持つ動詞である。このような動詞の表す状態の終点が明確ではないという点で叙述の範囲が限定されていないため、通常進行形が不可能である（“正在怀疑”“正在包括”“正在信任”などは成立しない）。以下の図 4-2 は未完了アスペクト動詞の表す動作行為が持つ可能な局面を表している。

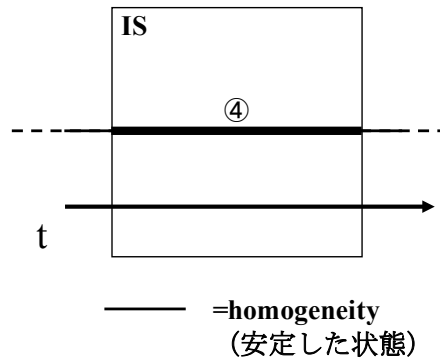


図 4-2 動詞の表す動作行為が持つ可能な局面

動詞の表す動作行為はこの始点と終点を含まない安定した状態④であるとしか考えられない。④を否定するのは安定した状態の存在を否定することである。この場合、受動文は「この安定した状態が存在しない」という動作行為が最初から発動しなかった「未生起」の意味を表している。つまり、未完了プロセスを表す否定の意味の受動文は「未生起」の意味しか読み取れない。

では、なぜ否定形式においてのみ、このような能動文と受動文の非対立が生じるのであろうか。通常、受動文は「動作主が何をしたのか」ではなく、「被動作主がどうなったのか」という被動作主の視点から事象を捉える構文である。以下は受動文におけるアクション・チェインである(図 5-1)。

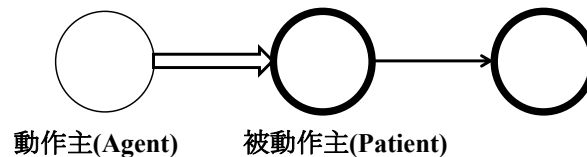


図 5-1 受動文のアクション・チェイン

アクション・チェイン<sup>3</sup>は認知言語学でよく用いられるモデルである。一つの動的な事象を描写する時に、どの参加者を強調してプロフィールするか、エネルギーの伝達のどの部分を抽出して描写するかなどによって、アクション・チェインもそれぞれ異なる。例えば、以下の図 5-2 は他動的な事象を一般化したものである。(太い丸は話し手が強調してプロフィールする対象であり、二重矢印は参加者間のエネルギーの伝達を示し、矢印は参加者の変化を表している。)

<sup>3</sup> Langacker2008:35-36 を参照。

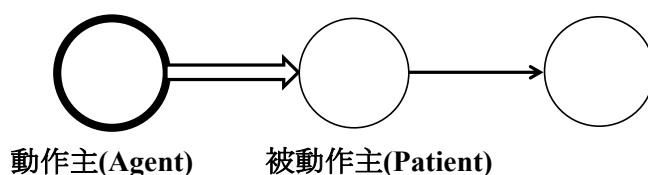


図 5-2 他動文のアクション・チェーン<sup>4</sup>

否定形式の受動文は事象の不成立を表し、「被動作主には動作行為の結果が生じない」ということに焦点が当てられる。動作主が最初から動作行為を行わなかったのは言うまでもなく、動作主が動作行為を行なったとしても、事象の終点に到達しなければ、被動作主には動作行為の結果が生じないことを表すこともできる。一方、「動作主が何をしたのか」という動作主の視点から事象を捉える能動文は、「動作主が最初から動作行為を行わなかった」という「未生起」の意味しか生じず、「未成立」のような事象の結果に焦点を置く場合は想定されない。それ故、否定形式において、受動文が「未成立」の意味を表す場合、能動文と受動文におけるヴォイスの対立関係が成り立たないのである。

## 5. おわりに

否定形式の受動文は「未生起」を表す場合、ヴォイスの対立関係が成立するが、「未成立」を表す場合、対応する能動文と異なる事象を表す点でヴォイスの対立関係が成立しない。それは述語部分の動詞句に内在するアスペクト的意味と深く関わっている。完了アスペクト動詞の場合、否定形式の受動文は二つの意味解釈ができるが、未完了アスペクト動詞の場合、否定形式の受動文は「未生起」の意味しか表せない。このようなヴォイスの非対立が否定形式においてのみ生じる原因は、受動文と能動文の焦点の相違にあると考えられる。

### [参考文献]

#### 日本語

木村英樹・鷺尾龍一(2008)「東アジア諸語にみるヴォイスの多様性と普遍性」、『ヴォイスの

<sup>4</sup> 図 5-1 と図 5-2 は Langacker2008:356 に基づいて作られたものである。

対照研究』、くろしお出版、pp.1-20

金水敏(2000)「時の表現」、『時・否定と取り立て』、『日本語の文法』、第2巻、pp.3-92、岩波書店

工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト』、ひつじ書房

高見健一(2011)『受身と使役—その意味規則を探る』、開拓社

中島悦子(2007)『日中対照研究ヴォイス—自・他の対応・受身・使役・可能・自発』、おうふう

早津恵美子(2005)「現代日本語の「ヴォイス」をどのように捉えるか」、『日本語文法』、第5巻2号、pp.21-38

村木新次郎(1991)「ヴォイスのカテゴリーと文構造のレベル」、『日本語のヴォイスと他動性』、くろしお出版、pp.1-30

林青樺(2009)『現代日本語におけるヴォイスの諸相 - 事象のあり方との関わりから』、くろしお出版、pp.97-128

#### 中国語

石毓智(2001)《肯定和否定的对称与不对称》、北京语言文化大学出版社、p.27

朱德熙(1982)《语法讲义》、商务印书馆、p.70

#### 英語

Langacker, R. W. (2008). Cognitive grammar: A basic introduction. OUP USA, pp.147-160